



ト리는 1億5千万年、ヒトは2百万年

ト리는、いまから約1億5千万年前のジュラ紀に、地球上に姿を現わしました。1861年、南ドイツのランゲン・アルトハイムの石切場から発見された化石——後にシソチョウ（始祖鳥・アーケオプテリックス）と名づけられたものがそれです。羽毛におおわれ、風切羽があつて飛べる点はいまのトリと同じですが、くちばしには歯があり、前足（つばき）にははっきりしたアシユビが3本残っています。これが、1億5千万年の長い間に進化し、分かれて、いま見るような、ヒトに真似のできない能力を持つさまざまなトリになりました。

ヒトに似た形の動物が現われたのは、2百万年ほど前で、それがヒトらしい生活を始めるのは5万年前に過ぎません。シソチョウが現われてから現在までを1時間とすると、ヒトが現われるのはその時計が59分59秒たった時になります。いまの世界は人間があらゆる場所を支配しているので、地球は昔から人間のものであったような錯覚をおこしますが、人間は地球

地球上に最近現われたシンマイだといふことができるでしょう。

絶滅してからでは間に合わない

さて、文化財には、人間がつくったものと、自然がつくったものがあります。美術工芸、建築物などは人工の文化財として貴重なものがあり、これらを大切にしなければならぬことは多くの人が知っています。ところがトリなど自然文化財の大切なことについては認識のかけている人が多いのは残念です。

自然文化財の大切な点は、一度なくなったら絶対に複製できない、ということです。金閣寺は再建できても、自然にある動植物は、その種が先祖から伝えてきた生殖細胞だけが再生能力を持っているので、それ以外のものからはつくることができません。種がほろんだとき——それは、その種の再生の望みがまったく絶えたときなのです——。

いま、世界の国々が莫大な費用を投じて、少なくなったトリの保護に国境を越えた努力をしています。絶滅してからでは間に合わない——このことばを、私たちはヒト自身の問題として、考えるべきではないでしょうか。



ヒトの目の前でトリの保護区、さ

財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社からシリーズとして制作するものです。